

# キルステンのこと

矢羽々 崇

キルステン・バイスヴェンガーさんは、私よりも一年早く獨協大学に着任していた。キルステンと一緒に仕事をするようになったのは、2000年4月からの半年間のNHKラジオでの「ラジオドイツ語講座入門編」の準備段階からだった。番組では、今はドイツに戻ったローマン・トルラーさんと三人で内容を作り、テキストを書き、放送用とカセット（後にCD）の音源を収録していた。当時は一回20分、全104回にわたる作業は非常に大変であったが、キルステンはにこやかにテキパキと仕事を片付けてくれた。その後もこの三人で同応用編で「ドイツ語喫茶室」を2クールにわたって担当した。入門編に比べて文法や語彙などの面で自由裁量度の高い応用編は、スタッフの松井さんや獨協OGの大澤さんとともに格段に楽しく仕事ができる。音楽のコーナーでは、キルステンにドイツのさまざまな音楽を紹介してもらった。例えばメンデルスゾーンの妹ファニーの音楽（このときはメーリケの詩「春が来た」による歌曲）のことを教えてもらったのはこの機会だった。いつでもシュヴァーベン人らしく tüchtig で hilfsbereit だった彼女にはとても助けられた。

はじめの頃は、たしかご主人の仕事の関係もあって奈良から毎週通っていたと思う。そのうちに横浜に引っ越し、ついで葉山に一軒家を建てて移り住んだ。招いていただいて、キルステンの故郷の料理である Käsespätzle をご馳走になったことを思い出す。まな板の上に Spätzle のゆるめの生地を広げ、それを包丁をすばやく動かして細いパスタ状に切っては鍋に落としていく「妙技」は、今でも鮮明に目に焼き付いている。また、丘の家からは、夕暮れにシルエットとなって富士山が中空に浮かぶように見えていた。

研究の面では、ご主人の小林義武先生と一緒にバッハ全集の編集の仕事をしていて、それが今になってみればライフワークだったことになる。専門外の私にはそれを評価することはできないが、実証的に基礎づけられたその研究成果は、高く評価されていると聞く。

バッハ全集の完結と前後して、小林先生が白血病となり、闘病生活が長く続いた。骨髄移植など、さまざまな治療法が施され、そのたびに病状は一進一退を繰り返していた。キルステンはまさに献身的としかいいようのない看病をし、一生懸命に小林先生のために最善を尽くしていた。彼女は手を抜かずに、ひたすら懸命に物事に向き合うから。それでも、愚痴ではないのだが、ふっと弱さを見せたことがあった（めったにあることでなかった）。「オプティミストであるにはそれを意志しないと (Optimistisch muss man wollen)」という話をしたことがある。哲学者アランの思想だ。ペシミストになるのは簡単で、悪い現状を見るだけでいい。オプティミストであるには、それにもかかわらず良い未来を引き寄せようとする意志の力が必要だ。その後、彼女と話すとき、メールするとき、optimistisch という単語が行き来したことを覚えている。

それでも、二〇一三年一月に小林先生が長い闘病の甲斐なくお亡くなりになったあと、彼女の心の空白をただのオプティミズムは埋めることができなかった。彼女にとって唯一の心の支えが小林先生であった。あの広い葉山の家から富士山をひとりで見るとは、辛いという言葉だけでは言い表せないことだったと思う。

ヘルダーリンの詩「別れ(第2稿)」は、恋人同士が現世での別れを嘆くが、忘却の川レーテの水を飲んだにもかかわらず、二人が来世で再会するさまを歌っている。最終節：

Staunend seh' ich dich an, Stimmen und süßen Sang,  
 Wie aus voriger Zeit hör' ich und Saitenspiel,  
 Und die Lilie duftet  
 Golden über dem Bach uns auf.

驚いて私はそなたを見る 声を 甘い歌を  
弦の響きを 時の彼方からのように聞く  
そして百合が香る  
黄金に 川をこえて 私たちのところへ

音楽で結ばれたキルステンと小林先生が再会し、ふたりで一緒に幸せでいることを願うばかりである。